第１回　ふくしま元気トーク　開催結果

【 開催概要 】

日　時	**平成３０年５月１２日（土）** 午後２時３０分～４時
テーマ	**ボランティアを語ろう！**
場　所	市役所本庁舎　７階 議会会議室

出席者	各分野で活動する市内のボランティア団体・ＮＰＯ法人の皆さん （１）福島市ボランティア連絡協議会　会長　安斎　精児氏 （２）福島大学災害ボランティアセンター　ゼネラルマネジャー　武田　若菜氏 （３）　〃　総務班　斉藤　亮太氏 （４）傾聴ボランティアほほえみ　会長　五十嵐　一男氏 （５）ふくしま花案内人　会長　河野　恵夫氏 （６）チームまるごみふくしま　代表　佐藤　いく子氏 （７）なかよしピヨピヨひろば　子育て支援部会　会長　古関　久美子氏 （８）吉井田まみい広場　実行委員長　鈴木　純子氏 （９）ふくしま通訳案内士会　会長　中西　勉氏 （１０）ＮＰＯ法人 うつくしまスポーツルーターズ　事務局長　齋藤　道子氏 （１１）福島市生涯学習活動推進員の会　代表世話人　南部　悦子氏 （１２）図書ボランティアの会　対面朗読班　班長　鴫原　朋子氏 （１３）認定 NPO 法人　ふくしま NPO ネットワークセンター　理事　内山　愛美氏
（福島市）	木幡市長

【１　市長あいさつ】

福島市は、この４月から中核市に移行し、新しいまちづくりがスタートいたしました。これはまちづくりを変えていくというだけではなく、プロセスつまり過程を変えていきたいと思っています。これからは、行政が主体となって結果を出すというだけではなく、市民の皆さんに過程でもいいので参加していただけるように、まず、まちづくりを進める過程を変えて進めていきたいと考えています。

私が掲げている「開かれた市政」でまず大事なのは、市民の皆さんからの声をきちんと受け止めて聴くこと、その次にはコミュニケーションです。

我々行政も聴くだけではなく、きちんと意見をお伝えし、市民の皆さんも納得して、相互理解の上で、福島のまちづくりや様々な活動にご参加いただくことが、これからの福島市として大切な姿かなと思っています。

本日このような場を通じて、皆さんから遠慮なくご意見をいただくことで、我々そして皆さんのこれからの行動もそれぞれ変えていけるのではと考えています。

【２　抱えている課題（困っていることなど）について】

（１）ボランティアに関わる人の確保について

- ボランティア人口が減ってきている。
- 若い層の取込みができず、高齢化している。
- ボランティアを始めようとする人は定年後の人が多い。
- 定年後に養成講座を受けて入会しても、活動と自身のやりたいことがマッチせず、辞めていく人が多い。
- 福島市民は奥ゆかしく、声をかけられれば行動するが、自ら手を挙げる人が少ない。
- 今の子育て世代は共働きが多く、子どもが０歳のときから働きに出るお母さんも増えており、時間に余裕がない。私たち世代が行っている活動そのままでは、若い人には引き受けてもらえない。
- 第１世代（ＮＰＯ法人制度ができた当時から活動する課題解決に熱意がある世代）と第２世代（震災後ＮＰＯ法人に就職している世代）で意識にギャップがある。組織内・組織同士で温度差がある。
- 震災後に多かった使命感を持ったボランティアから、「ボランティア」自体に関心の高い学生が増えてくるなど、学生側のニーズの変化があり、両方のニーズに対応しなければならない。
- 被災３県で福島は関連死が非常に多く、見守りを続ける必要性を感じているが、学生が集まらない。

市長　　絶対的な課題として、高齢化が進んでいるのは間違いないし、働く人の年齢もどんどん上がっているので、その結果、時間に余裕がある人が減っています。その点でも非常に難しくなっているのも間違いありません。

　ボランティア活動は、福島の場合、震災を機に「自分も何かしなくては」という気持ちによって支えられていた状況がありましたが、このことについては一定の風化が起きていることも確かだろうと思います。

≪課題に対する意見・アイデア≫

- 福島の人たちが「ボランティア」の語源通り、自ら手を挙げられるようになるといい。
- 定年を迎えてからではなく、現役時代から養成講座を受けて入会してもらうと活性化する。
- 「ボランティア」＝「生活」になるよう、私たちが日ごろからボランティアとして活動している行為が、さりげなく自然にできるような社会にしたい。
- 今後ボランティアを成り立たせるためには、今の時代に合ったボランティアとして、無理なくできる形に変えていくことも大事だと思う。例えば、子どもを見守るため、登校時間に合わせて外に出て、花に水をやる、ゴミを捨てるようにする。また、子どもの下校時間に合わせて、犬の散歩に行くようにするなど、普段の生活の少し延長くらいの無理なくできることを、地域の皆さんが一斉にすればいいと思う。

- ボランティアへの参加を毎回求めず、年に２回だけなど、できるときだけ参加すればいいと思う。その代わり参加人数を増やすなど、柔軟な方法に変えていきたい。
- 制度だけを理解して集まってきた場合、義務感になったり、疲れがでたりするのかもしれない。活動を通して喜びがあればやりがいになるし、それを周囲に伝えると「私も」と仲間も集まってくる。
- いつまでも「縁の下の力持ち」でいるのではなく、ボランティア活動には、社会にもそして自分自身にも得るものがあることを、もっと大々的にＰＲ・披露できるような機会があるといい。
- 福島市のハード整備はもう十分。ハード事業に関わった方に、ソフト事業にも関わって欲しい。
- ボランティアが最も成功したと言われるロンドンオリンピックでは、ボランティアを「ゲームズメーカー」という名称で募集し、７万人の枠に対し２４万人ほどの応募があった。名称の工夫で、敷居を下げる効果があったのだと思う。
- ずっと同じ人が活動していると「自分には無理」と思われがちになる。いかに敷居を下げるかが重要だと思う。

市長　「助けられる人」と「助ける人」を二極化するのではなく、サービスを受ける側も、サービスを提供する側、活動する側に回ることが大事になってくると思います。

以前香川県にいたときは、木幡保育園と言われるほど自分の家にはたくさんの人が集まり、妻がいなくても、よそのお母さんが家に来て、たくさんの子どもを見ていました。なんでも「受ける」のではなく「自分もやる」、そんな社会づくりを目指すのもアイデアかもしれません。

ＰＲの強化という点では、見る人は結局「関心のある人」である傾向が高い。ボランティアというのは、自発性をいかに持っているかが大事なように思います。福島大学では、いろいろなフィールドワークをベースにした教育も重視しているので、ボランティア活動自体を授業の一環として組み込むのもアイデアかと思います。

オリンピックの話では、既存のものではない、目新しさやワクワクさせる名称にすることによって、新しい流れを意識させて、人を引き込むのは良いアイデアと感じました。

（２）活動スペース等の確保について

- 練習・作業・打合せ場所の確保が難しい。学習センターは定期的に活動している団体の予約があるので、なかなか使用できない。活動するにあたり、学習センター等の公共施設の使用について調整してもらえたらありがたい。（市立図書館・保健福祉センターなど）

● 市役所９階に新たに執務室ができたことから、打合せできるスペースが狭くなってしまった。食堂が営業しない時間は食堂内を開放するなど、スペースを有効に使えたらありがたい。

≪課題に対する意見・アイデア≫

● 市民活動団体の皆さんは、大町「福島市市民活動サポートセンター」の会議室が、無料もしくは低料金で使用できるので、ぜひ活用して欲しい。空き状況はネットでも確認できる。

市長　活動場所は「開設」という手もありますが、できれば「空き家」、特にビルの空き店舗などを使いたいと思っています。まちの中心部で皆さんが出入りすれば、まちの賑わいに繋がるので、取り組めたらいいと思う政策の一つです。

（３）活動分野での課題について

● 震災から７年が経過し、避難者のニーズが大きく変化している。

● 福島市は外国人視点の案内が遅れているように思う。駅周辺にたくさんある彫刻は、外国語案内がないため、毎回外国人に尋ねられる。まず英語、できれば中国語、韓国語で説明文があるといい。

● 福島市発行の英語版観光ガイドについて、情報が古くなっているのでそろそろ刷新して欲しい。

● ＪＲ福島駅の西口１階・東口の外トイレ、花見山公園は和式トイレしかない。和式トイレに慣れていない人も多い。市長が掲げているトイレの洋式化に期待している。

● 花見山公園は、バス降車場所から入口まで距離があり、高齢者や足が弱い方の中にはそこで諦める人も多い。来年は開園６０周年なので、そういった方々の移動手段を市や関係団体と考えていきたい。

● 「子育てしやすいまちづくり」を第一に活動しているが、高齢者に対する政策が多いように感じる。子育てしやすく、まちも輝いていけるような政策をお願いしたい。

市長　観光ガイドが古くなっているのであれば、刷新について検討の必要性があると思います。

先日、土湯の中ノ湯がオープンしましたが、外国人のニーズが高い貸切風呂を整備したにも関わらず、英語表記の案内がありませんでした。今は英語表記の案内があることは当たり前ですので、そこは徹底して取り組んでいきたいと思います。

【２　その他の意見など】

- 「福島市市民活動サポートセンター」に登録すると連携会議（現在登録３００団体）に参加できるので、ぜひ登録して欲しい。
- 担い手不足、高齢化という共通の課題があるので、今後は参加者同士で事業を共有して、事業をジョイントしたり、一部をサポートし合ったり、ボランティア同士の交流など連携を図れたらいい。
- ロンドンオリンピックでは、８０歳代のボランティアも活躍した。ボランティアには、年代・性別・役職・学歴など関係なく一緒に活動できるところが魅力だと思う。この多様性を、中間組織やプラットフォームという形で活かせる取組みが出来たら、より間口が広くなり、敷居が低くなって活動ができるのではないか。

市長　地域との連携の話がありましたが、福島市には「自治振興協議会」という非常に強い自治組織があり、これまでとてもよい連携が図れています。

私自身はライフワークで行っていますが、例えば品川は「８３運動」という運動を行っています。皆さんが８時と３時に外を歩くことにより、子どもの安全を確保するというもので、お年寄りも協力することができます。子どもだけではなく、認知症による徘徊などへの見守りにもなります。そのようなことを自治振や地域にお願いしていくことも一つだと思います。

【参加者の感想】

- 様々な分野でボランティアをしている団体の話を共有でき、非常に有意義な時間だった。
- ボランティア団体は横のつながりが少ないので、お互いの活動を知る意味でも良い機会になった。
- 市長自らが司会をつとめて頂いたのは、非常に良かった。
- 市長の市政に対する本気が伝わってきて、大変感銘を受けた。今度は現場を見に来てほしい。
- 次は担当部署に団体の活動の様子を見に来てほしい。県との連携もお願いしたい。
- 意見交流だけではなく、行政職員を交えたグループワークなどで意見交換してみたい。担当部局ではない職員との交流により新しい気づきがあるように思う。
- 限られた時間なので、意見の出し合いになったが、意見を受け発言できる流れにできれば、もっとつながれるように思う。
- 活動の分野が異なるので、できれば同じ分野の方々と話し合いができたらいい。
- 「福祉ボランティア」、「観光ボランティア」など、テーマをもう少し絞った方がよかった。